

『世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。2 東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。3 彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。4 彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。5 主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、6 言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。7 我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」8 主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。9 こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。』（創世記11章1－9節）

聖霊降臨日、ペンテコステのお祝い、おめでとうございます。

このお祝いは、イエス・キリストが天から聖霊を降り注いで下さったお恵みを記念するものです。このイエスさまの聖霊を受けますと、それまでと違った新しい言葉で話せるようになります。たとえ相手が誰であっても、どのような壁でも越えて対話をして行けるようにしてくれます。相手が外国人で違った言語をつかっている人であっても、心を通じ合わせる事が出来るようにしてくれます。その新しい言葉というのはどういう言葉なのかということですが、今日の聖書の言葉で語られています古い人々の言葉と比較することで考えてみたいと思います。

ここでは、世界中で同じ一つの言葉で話していたのだとあります(1節)。その統一された言語のおかげで、人々は効率よく新しい技術を開発することが出来るようになりました。焼き煉瓦やアスファルト用いると行った最先端技術のおかげで、それまで不可能だったとても大きな町や高い塔を建てる事が出来るようになったのです。そして、なんと神さまがおわします天まで届く、とても高い塔を建てようとするところまで、人間の欲求はつきることはありませんでした。このことに対して神はそれをやめさせるために、一つだった人間の言葉を混乱させて、人々を世界各地に散らしたのだとあります。そうして、世界中の人々はそれぞれ違う言語を話すようになりました。神はなぜ、その高い塔や大きな町を建設することを止めさせたのでしょうか？

このことは、現代の私たちにも問いかけていることだと思います。私たちの住む日本でも、大きな都会の町はどんどん膨らんで、人や物が沢山集まっていますね。一方で、小さな地方の町はどんどん小さくなって行き、人も物も大きな町に吸い取られてしまっているように思われます。先日、私は東京に行ってきました。新宿を通りましたが、より以前行ったときより人がたくさんいて、街角でたくさんの方の言語で話されていました。英語やヨーロッパの言語、中国語や韓国語、東南アジア諸国の言葉や南米系のポルトガル語やスペイン語など実に多彩な言葉が交わされています。これは、そろそろ神さまが各地方に住人を散らすことの前兆なのだろうかと思った次第です。「(大きな町)ここは人が生活するところではない。働くところだ。」という言葉聞いたことがあります。神奈川県というかなり大きな町で 40 年間クラス間、息苦しさを感じてきた私としましては良くわかる言葉です。いずれ本来の自由で伸び伸びとした生活を求めて脱出を試みたいという願いが、この言葉に込められている

ように思われます。

今日の聖書の言葉から考えれば、このように町が大きくなりすぎることを、神は良く思っていないですね。これ以上町が大きくなり建物が高くなると、人間が何か企てても妨げることが出来なくなると大変警戒しています(6 節)。これはどういうことか、例えば 5 人ぐらいのグループだったら、悪いことを何か企んでも止めさせるのは比較的容易だと思います。グループの中で弱くておとなしいあの人に、嫌なことを全部やらせようと企んだとします。それを見た少しでも正しく生きようとしている人が、「そんなことしたらダメですよ！」と注意したら、なんとか止めさせることが出来るかも知れません。しかし、これが 50 人だったらどうでしょうか？一人で間違いを指摘することは勇気がいりますし、何とか注意したとしても、集団で無視するとかごまかすとかされてしまえば、それ以上手出しができません。なんならそのうるさい人も、力づくで暴力的に言うことをきかせることだって出来てしまいます。そうなってくるとみんな無気力になり、長いもの大きいものには巻かれるしかにとあきらめることが町中に蔓延して、苦しんでいる人を見ても気がつかない振りをするようになってしまうでしょう。

今、その東京では、オリンピックのために新国立競技場を建設しています。その工場の現場で働く人がインタビューされている記事を読みました。大変短い工期で、しかも安く早くするようにとせっつかれて、作業員が思うように集まらないそうです。ですので、そこで働かざるをえない人は、どうしても人手不足ですので、一人で二人分、三人分働かないと間に合いません。残業、残業で、朝早くから働いて遅くまでかかる中で、お互いの顔を叩いて眠らないようにしているのだということでした。その作業員を管理している現場の監督官も大変です。親会社から下請けとしての仕事をもらうわけでした、親会社の言うことというのは絶対ですね。嫌だと断ったら他の下請け会社に仕事を持って行かれてしまいます(800 余りの関連会社があるとのこと)。ですので、上の立場の人が言うことは、「神の言葉」のように何が何でも聞かなくてはなりません。無理難題を押しつけられてどうしようもなくなり、追い込まれて自殺してしまった 23 歳の現場監督の人がいます。そこまでして、人の命を犠牲にしてまでも、オリンピックというのはやらなければならないのでしょうか。このような話を聞いたら、素直にオリンピックを楽しむ気にはなれないのではないのでしょうか。

聖書の教えで言いますと、一人の人間の命を軽んずる町や国は滅びに向かっているのだとハッキリ言っています(申命記 4 章 25-27 節)。たとえすぐに衰退していなくとも、中身としては生きていてもとても本当には生きてはいない「生ける屍」(民数記 16 章 33 節)となっているのだと聖書は言うのです。ですから、神はそれ以上人間の悪い企てを進ませないように、人々の悪しき繋がりを断ち切るのです。聖書が証する神は、人間を奴隷の縄目から解放し自由な世界に解放して下さる「解放の神」です(申命記 5 章 6 節)。人を人とも思わぬ悪い命令や指示が伝達されないように、言葉を混乱させてそれ以上苦しみが酷くならないようにと各地方へ逃がして下さるのです。エゼキエル書という書に、こういう神のみ言葉があります(13 章 19 節)。「少しばかりのパンを得るばかりに、死ぬべきでない命を、死なせてはならない」という神が一人の命を尊ぶみ言葉です。このような聖書の言葉は、それまでの自分の生き方を人々に深く顧みることを促すことでしょう。「何のために自分は生きているのだろうか、今やっていることが本当に自分や周りの人のためになっているのだろうか。」「自分はなんてバカげたことのために、命をすり減らして来てしまったのだろうか。」そう言って、大きな町での生活に見切りを付けて地方の小さな町に散って行く人が今、まだ少ないですが出てきています。都会の暮らしに慣れてここに来れば幸せになれると信じてきたけれど、実は自分はこの町の犠牲にされてきただけではないかと気づかされるということが起きています。

人間のそれまでの古い言葉は、「大きいことは良いことだ」と言います。日本一、世界一高い塔やビルは誇るべきことなのだと行って、人々を犠牲にしてまでも大きくすることを強いる言葉なのです。それに対して、聖霊によって与えられた新しい言葉は、大きさや高さを誇るようなことはしません。それよりも、その中身のあり方、心のあり方の方を褒め称えます。たとえ小さくとも、たとえ低くとも、その場所で皆が神の御心に従っていることを喜ぶ言葉です。一人の人間の命を、何よりもかけがえない大切ないのちとして慈しんでいる姿を、神からの恵みとして賛美する言葉なのです。古いそれまでの人間の話す言葉は、互いの命をすり減らしてつぶしてしまう言葉でありました。いくら最新の技術を発明しても、それを人の命を圧迫して殺してしまうために用いてしまうのなら、そのような学問は返ってなかった方が良かったです。

イエス・キリストの霊を受けて話し始める新しい言葉は、人々に命を吹き込み死んでいた者を生き返らせ、正しく生きる道を示すことの出来る「命の言葉」であります。イエスさまは、その新しい命を与える言葉によって人々を教え、そして癒やしを行い沢山の人々をその御前に集めました。ただですね、その集まって来る人々の規模が大きくなって行くと次の町に行かれ、一つの町で教会を大きくするというのをなさいませんでした。そしてそのことは、イエスさまの新しい教えを引き継いだ弟子たちにも言えることです。パウロという人が良い例です。パウロもせっかくだまか行くと教会が大きくなってくると、やはり次の町を目指して旅立って行きました。それはやはり、この大きくなることを警戒する聖書の言葉に従順だったからです。経済的に苦しくて貧しくとも、豊かになって神の御心から墮落するよりはずっと良いとそう考えたのでしょう。「貧しい人々は幸いである。神の国はあなたがたのものである」とイエスさまは語られました。このイエスさまの新しい言葉に、弟子たちは皆すっかり心を打たれてしまったのです。弟子たちは皆、自分たちが行くところが小さかろうが人が少なかろうが、これらの新しい言葉を持ち歩くことで、どこにおいても神の国をそこに建設することが出来ると、深く信頼していました。返って沢山大きなものを持っていたら、身動きがとれなくなってしまいますので、小さいことは実はとても良いことなのですね。大きくなることで、また古い昔の言葉に戻ってしまうよりも、小さくて互いに理解出来る単位で歩むことを現代の私たちも望みたいと願います。たとえ話す言語が違っていても、「あなたの目を見れば大丈夫、あなたは信頼出来ます」という、そのような生き方さえしていれば、言葉の壁は乗り越えて行けますね。ペンテコステのこの記念の日に、今また、聖霊を受け、新しい言葉を聴き、そして新しく語り出すことの思いを新たにいたしましょう。